

タコ  
の  
伝  
言

登場人物

森<sup>もり</sup> 美夏<sup>みか</sup>（12） 中学1年生

タコ（10） 謎の少年

森 玲子<sup>れいこ</sup>（42） 美夏の母親

## 概要

美夏は徳島県由岐地区に住んでいる。

避難祭りが面倒で防波堤でさぼっていた。

そこに時代がかった浴衣を着た謎の少年タコが現われる。

タコは美夏に大昔の津波の幻覚を見せる。  
はじめて目の当たりにする津波に美夏は恐怖を覚える。

目を覚ますと、タコは消えていた。

避難祭りの帰り道、美夏は地蔵を見つける。

それは江戸時代の正平地震のときに建立されたものだった。

その地蔵の顔はタコによく似ていたのだっ  
た。

サイレンの音。

アナウンス「ただいま由岐湾内地区に大津波警報が発表されました。ただちに避難してください」

波の音。

玲子「美夏。防波堤なんかで何してるの。お祭りだよ。避難祭り」

美夏「バカみたい」

玲子「みんな来てるよ。あんたも来なさい」

美夏「何が避難祭りだよ。ただの防災訓練でしよ」

玲子「楽しいよ」

美夏「楽しいわけないじゃん。私は行かないから。ここでフナムシ見てたほうがマシ」

玲子「こら」

美夏「ほつといて」

玲子「お母さんは行くけど。あとであんたも

来なさいね」

美夏「はいはい」

サイレンの音。

アナウンス「住民のみなさんは高台に避難し  
ましょう」

美夏「バカみたい。津波が来たってさ、運が  
いい人は助かるし、運が悪ければ死ぬ。そ  
れだけじゃん。訓練したって変わらないよ」

タコ「大変だあ！」

美夏「えっ？」

タコ「山が鳴いてる！」

美夏M「振り向くと、そこには時代がかった  
汚い浴衣を着た男の子が立っていた」

タコ「おいそこの姉ちゃん、あれを聞け！」

美夏「は？ あんた誰」

タコ「おれはタコだ。お前、あの山の声を聞

いて怖くないのか」

美夏「タコ？ 変なあだ名。あれはサイレンだよ。今日は避難祭りの日なの」

タコ「ひなんまつり？」

美夏「知らないの？ 最近越して来た子？」

タコ「お前、変な格好してるな」

美夏「あんたのほうが変わよ。私のことは気にしないで、高台に行ったら？」

タコ「高台に？」

アナウンス「大津波です。住民のみなさん、

高台に避難しましょう」

タコ「ひゃあ！ 津波だ！ 姉ちゃん、非難

しろだって、神さまが言ってるぞ！」

美夏「はあ？」

タコ「さあ、立って！ 行こう！」

美夏「ちよつと、手をひっぱらないでよ！」

タコ「走れ走れ！」

美夏「手が痛いって。ひっぱらないで！」

走り去る足音。

階段を登る足音。

美夏「きつつい。学校の外階段3階分って」

タコ「ほれほれ。姉ちゃん、だらしねえな」

美夏「うるさい。来たくて来たわけじゃないのに」

タコ「ほれ。屋根の上だ。はあ、高いなあ。

遠くの海まで見渡せるぞ」

美夏「足が痛い」

玲子「美夏。来たんだね。こっちこっち」

美夏「お母さん」

玲子「あら、こちらの男の子は？」

タコ「おれ、タコ」

玲子「タコ君。変わったお名前ね。美夏のお

友達？ 美夏をつれてきてくれたの？」

タコ「うん」

玲子「ありがとう」

タコ「へへ」

玲子「あら、タコ君マスクしてないわね。家に忘れたの？ 確か実行委員さんが予備を

持ってたと思う。待ってて」

タコ「ますく？」

美夏「ほら、コロナのことがあるから」

玲子「はい。これ使って。いざという時のために、食料だけじゃなくてマスクや医療品も準備してあるんだよ」

タコ「これ、どうやってつけるんだ？」

美夏「ええ？ ほら、かして。耳にひっかけるの」

タコ「ふふ。くすぐったい。な、似合う？」

美夏「変なやつ。マスクを知らないみたい」

タコ「なあ美夏、津波はほんとに来るのか？

見ろ。今日の海は風だぞ」

美夏「え？ だから訓練だつてば。嘘なの。

津波が来たつていうことにして、みんなで避難する練習をしてるの」

タコ「練習か」

美夏「あんた、ほんとに知らないんだ」

タコ「津波が来ないなら、それが一番だ。でも、海の神さまは残酷だからな」



美夏「何よ、わかったように」

タコ「俺の父ちゃんも母ちゃんも兄ちゃんも、  
波に飲まれたんだ」

美夏「え、そうだったの？ ごめんね」

タコ「そうだ。そして俺も海に飲まれた。一  
瞬のことだった」

美夏「え？」

波が迫ってくる地鳴りのような轟音。

美夏M「気がつくど私は、さびれた漁村の中  
に立っていた」

人々の悲鳴。

美夏「いったいどこ?! ここ。あ、タコ。  
いったい何が起こってるの？」

タコ「海の神さまは残酷だ」  
美夏「怖い！ 何か来る！」

美夏M「私は知らなかった。地面を震わせ、すべてをなぎ倒し、水平線の向こうから巨大な怪物が向かってくる。何もかも飲み込むその速さと大きさに、私はなすすべもなかった。土砂や流木を巻き込んだ巨大な波が私の体を押しつぶした。私は無我夢中で近くの砂利や石をつかんだ。けれど、あっという間に目の前は真っ暗になった」

津波の轟音。

美夏「いやあっ！ 助けて！！」

タコ「海はすべてを飲み込んだ」

美夏「く、苦しい……！ 誰か、助けて」

タコ「美夏。海はいつか荒れる。誰にも止められない」

美夏「助けて！ ハッ」

美夏M「気がつくのと、私は元の学校の屋上に立っていた」

美夏 「(荒い呼吸)」

玲子 「美夏。あれ、タコ君は？」

美夏 「え？ あれ？ タコ？」

玲子 「しようがないねえ。美夏もあの子も」

美夏 「お母さん。信じてもらえないかもしれない

ないけど、私、今、津波に飲まれたんだよ」

玲子 「ええ？ 夢でも見たの？」

美夏 「夢？ 夢なの？」

玲子 「だって、ずっとここにいたじゃない」

美夏 「本当に？ すごいリアルな夢だった。

一瞬で体がバラバラになって、目の前が真っ暗になって」

玲子 「美夏。あんたその手。何をにぎってるの？」

美夏 「え？ あっ」

玲子 「砂利に石ころ。あーあ、手が真っ黒じゃない」

美夏 「やっぱり夢じゃなかったんだ……」

玲子 「大丈夫？ 顔色悪いわよ」

美夏 「怖かった。すごく」

玲子「あらあら。泣いてるの？　大丈夫？  
もうすぐ訓練始まるけど、休んどく？」

美夏「ううん。参加する」

玲子「そう。無理しないでね」

サイレンの音。

玲子「お疲れ様。さ、帰ろう」

美夏「うん。色々やるんだね。学校のグラウンドでSOSの人文字書いたのは楽しかったかも」

玲子「事前復興って言ってね、災害が起きる前から被害から立ち上がるための計画を練っておくんだって」

美夏「うん」

玲子「どうしたの。素直になっちゃって。あのタコ君って子、最後まで来なかったね」

美夏「そうだね。あ、お母さん、あれ」

玲子「え？」

美夏「こんなところにお地藏さんなんてあつ

たっけ」

玲子「ああ、これ。これはね、津波の災害で亡くなった人のために大昔に彫られたもの。

たしか江戸時代の正平しょうへい地震のときね」

美夏「そんな昔から地震はあったんだ」

玲子「そうよ。地震と津波を繰り返して、それでもこの地域は何度でも立ち直ってきたんだよ」

美夏「すごいね」

玲子「あら。このお地蔵さん、マスクなんかしちゃって。それに、この顔。誰かに似てない？」

美夏「お地蔵さんに手を合わせて帰ろう。お腹すいちゃった」

玲子「そうね」

美夏「じゃあね、タコ。また来るね」

玲子「何か言った？」

美夏「何でもない。帰ろう、お母さん」

波の音。

〈了〉